認知症高齢者の行方不明を防止する支援

― 小規模多機能型居宅介護利用者の一事例 ―

○発表者名　社福）こうほうえん　小規模多機能型居宅介護デイハウスじゅんぷう　河本　美紀
共同研究者名　社福）こうほうえん　小規模多機能型居宅介護デイハウスじゅんぷう　森山　大介

１．問題提起

小規模多機能型居宅介護デイハウスじゅんぷう(以下じゅんぷう)では地域密着型サービスとして、要介護者となっても在宅での生活が継続できるよう支援している。

令和元年 11 月より利用のＴ氏は、じゅんぷう近所の市営住宅で精神疾患の長男と二人暮らしの生活をしている。アルツハイマー型認知症の進行により、情緒的混乱に陥ることがしばしばあり、常に長男の見守りが必要な状態となっていた。自宅から一人で外出し、行方不明となることがあり、その都度職員、警察で捜索する等対応に苦慮していた。

徘徊行動は BPSD の中でも二次的被害・事故等のリスクが高く、死に至るケースも多い。また、介護者や周囲の人の疲弊感も強く、精神疾患のある長男は特にその症状が顕著で、在宅介護の限界を強く感じていた。今回、在宅生活継続のために取り組みを行ったので、報告する。

２．事例対象者

氏　　名 ： Ｔ氏　女性　85 歳　　要介護１
主な既往歴：アルツハイマー型認知症　双極性感情障害
障害高齢者の日常生活自立度 ：Ａ1
認知症高齢者の日常生活自立度 ：Ⅱb
MMSE：7 点
排泄：自立
移動：自立　独歩
家族構成：長男と 2 人暮らし
利用開始日：令和元年 11 月 1 日
※長男の事情により住み慣れたＡ町から市内に転居
　２人での生活に不安もあり、じゅんぷう利用開始
(今回の研究につきご本人ご家族の承諾を得ております)

２．目的・方法

①送迎ルートの確認と、近隣住民との関係性を作り、支援の協力が得られること

Ｔ氏の自宅とじゅんぷうまでは歩いて 300ｍの距離にある。利用日には職員がＴ氏と一緒に徒歩で送迎する。ゆっくりと散策しながら周辺の目印を確認し、土地勘を養う。

実施期間：令和元年 12 月 4 日～令和 2 年 2 月 20 日

②GPS 機能を用いた模擬捜索訓練で、行方不明時に備える

長男は GPS の操作方法に不慣れなため、Ｔ氏が行方不明になった場合を想定し、職員と長男で模擬捜索訓練を行う。

日　時：令和 2 年 1 月 29 日　14：00
場　所：Ｔ氏自宅
役　割：Ｔ氏役（職員Ａ）　捜索班（長男・職員Ｂ）　記録班（職員Ｃ）

３．結果

①帰宅ルート確認

期間中、Ｔ氏の利用日に計 30 回実施した。
実施内容として
・公園とリスの像を目安にする
・送迎時は近所の方に挨拶、声かけを行い顔なじみになってもらう
・間違えやすい場所や様子を記録する
以上の３点を職員全員で申し合わせ、取り組みを開始した。

初日から 10 回目までは、Ｔ氏に自宅へ帰ることを説明した後、後ろで付き添い助言なしで歩いてもらった。大きく道を外れてしまうことがあり、職員が声かけし修正した。(図 1)

図１：初日～10 日までの主なルート

公園付近の十字路では左に曲がらないといけない場所を、初日から 10 回目まで毎回必ず直進していた。10 回目以降からは職員がＴ氏の前を歩き、公園に着くと「公園ですね」「リスの人形がありますよ」と繰り返し声かけし認識してもらった。その結果、Ｔ氏は公園やリスの銅像を指さし、声を出して認識しながら左に進むようになり、自宅までの道のりを間違いなく進むことが出来るようになった。(図２)

目印を繰り返し認識してもらうことで、近所なら職員の見守りで帰れることが分かった。また、この取り組みで送迎時に近所の方とも顔なじみになり、挨拶を交わす中でＴ氏の状況を理解していただき、同じ団地に住んでいる方も「あんたの家はあっちの棟ですよ」と声をかけてもらう等、今後帰宅困難になった場合に地域の支えが期待できると感じた。

図 2：目印のポイントと 10 日目以降の主なルート

②模擬捜索訓練

訓練内容

・Ｔ氏役（職員Ａ）がＴ氏の携帯電話を持ち外へ出る。行先は捜索班には伝えない

・外出５分後、捜索班は GPS を確認しながら捜索開始

・Ｔ氏役（職員Ａ）を発見次第、訓練終了。自宅へ帰り意見交換

以上３点を全員で確認し、訓練を開始した。捜索班の職員Ｂが長男に携帯 GPS の使用法を説明しながら場所の特定を行い、約 3 キロ離れた場所でＴ氏役職員を 11 分で見つけることが出来た。（図 3）長男は GPS 機能の操作は初めてであったが、携帯電話は日頃使い慣れていることもあり、職員の説明をすぐに理解され問題なく操作できた。

長男も「これなら家から勝手に出ても探せるな」という感想が聞かれた。

図 3　模擬捜索訓練経過表

	T氏役 ----→	捜索班 ——→
14:04	①捜索開始地点（片原通り交差点）	1　電話があり捜索開始　GPS起動させる
14:07	②ドラッグストア入店	2　GPS捜索開始：ドラックストアの近くを示す
14:10	ドラッグストア退店	3　GPS再検索：ドラックストアから動いている
14:11	③桜土手通り	4　ドラックストアに到着するも周辺見当たらず GPS再検索：桜土手方面を示している
14:15	④発見地点（有門橋付近）	5　桜土手に向かうと信号待ちをしているT様発見

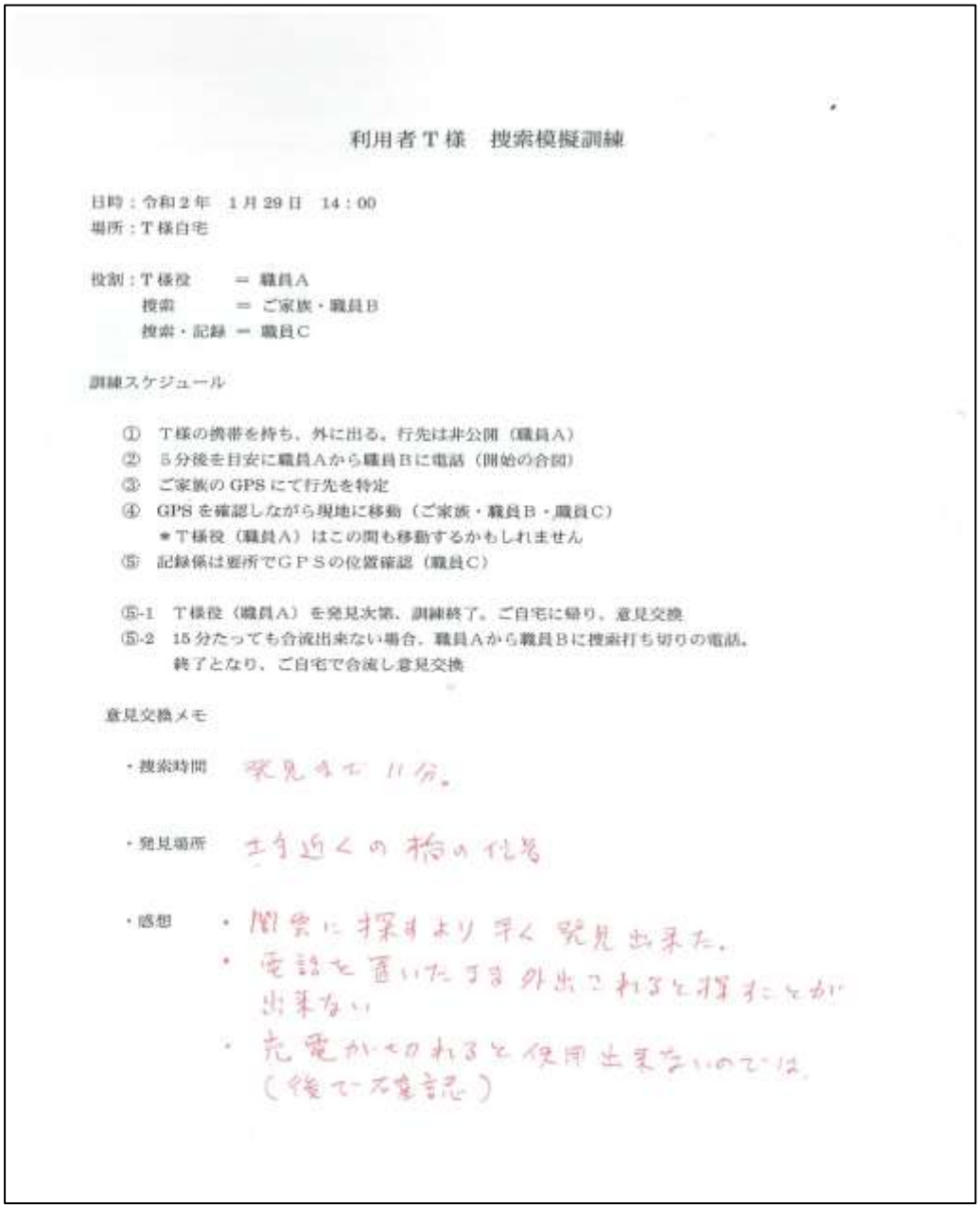
４．課題

携帯の GPS 機能は、位置情報が常にリアルタイムで表示されるものではなく、更新ボタンを押したときの位置情報が表示されるものと分かった。そのため、捜索中に行き違いが生じてしまうことが今回の訓練で知ることができた。

また、実際に帰宅困難になった場合、認知症のＴ氏が携帯電話を所持していて家に置き忘れてしまう、充電が切れる、電源が OFF になっている等の場合捜索が出来ないことが意見交換の中で出た。最近では認知症高齢者用の GPS 見守りサービス等様々なアイテムが発売されているが、経済的な理由等により、今回使用中の携帯電話での取り組みとなった。一定の成果はみられたが、今後に向けてはアイテムの選定等検討が必要になってくると考えられる。

昨今、行政から認知症高齢者などの行方不明者捜索依頼のメールが多く入るが、捜索に時間がかかり、事故や死亡例も少なくない。このような事例を事業所として未然に防ぐためにも、GPS 機能の活用を提案していくことで、安心して在宅生活を継続できる可能性が広がり、家族の不安や負担の軽減に繋がるものと考える。

図 4：意見交換メモ



利用者Ｔ様　捜索模擬訓練

日時：令和２年　１月 29 日　14：00
場所：Ｔ様自宅

役割：Ｔ様役　　＝ 職員Ａ
　　捜索　　＝ ご家族・職員Ｂ
　　捜索・記録 ＝ 職員Ｃ

訓練スケジュール

① Ｔ様の携帯を持ち、外に出る。行先は非公開（職員Ａ）
② ５分後を目安に職員Ａから職員Ｂに電話（開始の合図）
③ ご家族の GPS にて行先を特定
④ GPS を確認しながら現地に移動（ご家族・職員Ｂ・職員Ｃ）
　＊Ｔ様役（職員Ａ）はこの間も移動するかもしれません
⑤ 記録係は要所でＧＰＳの位置確認（職員Ｃ）

⑤-1 Ｔ様役（職員Ａ）を発見次第、訓練終了。ご自宅に帰り、意見交換
⑤-2 15 分たっても合流出来ない場合、職員Ａから職員Ｂに捜索打ち切りの電話。
　　終了となり、ご自宅で合流し意見交換

意見交換メモ

・捜索時間　発見まで 11 分。

・発見場所　土手近くの桜の木

・感想
・闇雲に探すより早く発見出来た。
・電話を置いたまま外出されると探すことが出来ない
・充電がなくなると使用出来ないのでは。
（後で確認）